

村上春樹作品の魅力語る

生田キャンパスで人文科学研究所講演会

世界50カ国以上に翻訳されている村上春樹さんの小説を巡る講演会(人文科学研究所「伊吹克己所長」主催)が11月8日、生田キャンパスで開かれた。「ブルウエイの森」「1Q84」などの英訳版を手がけたジェイ・ルービンさん(ハーバード大学名誉教授)が村上作品の魅力と翻訳の面白さ、難しさを日本語で語った。

「私だけに書いてくれる作家」

英訳者 ジェイ・ルービンさん



「世界中の読者をみなそういう気持ちにさせるのではないかと、村上作品の人気の秘密を説いた。さらに「未解決の神秘を読者に残す」「人間の普遍的な孤独を描き、日

常生活に潜むミステリー」の描写が彼の魅力の核。小説を支える日常生活の把握が確だから可能になる」と語った。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

司会の高橋龍夫教授(日本近現代文学)と親交があることからこの日の登場が実現したルービンさんは、「件から見た村上春樹」と題して講演した。ルービンさんは、シカゴ大学で日本文学を専攻し、明治、大正期の文学を中心に研究してきた。

夏目漱石や芥川龍之介の作品の英訳をする一方、「く」になった作家の作品ばかり読んできたが、現在活躍する日本の作家の作品はどのようなものか」と村上さんの作品世に「その印象を「私のためだけに書いてくれる作家」という気持ちにさせてくれた。それは国籍を問わ

「村上文学の人気の秘密を日本語で講演するジェイ・ルービンさん」

「村上春樹 表象の圏」

人文科学研究所講演会「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

クラシックとジャズ音楽とのかかわり

米村准教授 & 佐久間講師



米村みゆき准教授(右端)の講演で演奏する専フィルの広瀬さんと多勢さん(左から)

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

ジェイ・ルービンさんの講演を前に、村上作品にあふれるように登場する音楽をテーマにして、米村みゆき准教授(日本近現代文学)と佐久間由梨子准教授(アメリカ文学、黒人文学・詩)がそれぞれ講演した。

米村准教授は「ブルウエイの森」のフレームスの交響曲第4番、『海辺のカフカ』のシューベルトのピアノ・ソナタ第17番など、作品のなかの音楽シーンを朗読し、その情景に合わせて専修大学

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「村上春樹 表象の圏」

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

「翻訳の仕事のプロセスは、翻訳者の主観的なものではあるが、何千何万という読者に、翻訳でしか手が届かない世界をのぞかせることができると結んだ。

『いのちの便り展』

サテライトキャンパスで

文・新井ゼミ生の集大成

戦地から家族や恋人を気遣う

軍事郵便

「坊や元気か、良い子で居るか……兵士が家族や友人・恋人に宛てた軍事郵便を紹介する『いのちの便り展』が11月7日から16日までサテライトキャンパスで開かれた。来場者は300人を超え、連日にぎわった。

「坊や元気か、良い子で居るか……兵士が家族や友人・恋人に宛てた軍事郵便を紹介する『いのちの便り展』が11月7日から16日までサテライトキャンパスで開かれた。来場者は300人を超え、連日にぎわった。



「展示の軍事郵便を囲む新井教授(右)と、(左から)小林ゼミ長、小川瑛也さん(文)。